令和元年１２月９日

府中市議会議長
　横田　　実　様

市民フォーラム
代表　にしみや　幸[redacted]

行政視察について（報告）

このことについて、次のとおり報告します。

１　日　時　　令和元年７月３０日（火）～８月１日（木）

２　視察地及び目的
⑴　岩手県遠野市「遠野市の災害対応行政（総合防災センター及び遠野市後方支援資料館について」
⑵　岩手県釜石市「ラグビーのまち釜石の取り組みについて」
⑶　宮城県岩沼市「第２次岩沼市健康づくり市民計画に基づく市の取り組みについて」

３　視察者　　手塚としひさ、村崎啓二、稲津憲護、にしみや幸一、須山たかし、清水勝、前川浩子

４　視察内容及び所感
別紙のとおり

市民フォーラム

行政視察　報告

2019 年 7 月 30 日～8 月 1 日

参加者

手塚としひさ、村崎啓二、稲津憲護、にしみや幸一、
須山たかし、清水勝、前川浩子
※なお、都民ファーストの会の渡辺　将議員も視察に参加

行　程

７月 30 日（火）

府中本町駅 JR 武蔵野線→ 大宮駅 東北新幹線→ 新花巻駅 JR 釜石線→ 遠野駅 市役所送迎→ 遠野市防災センター→遠野市後方支援資料館 市役所送迎→ 遠野駅 JR 釜石線→ 釜石駅 徒歩→宿泊先（釜石復興ビル）

７月 31 日（水）

宿泊先 市役所送迎→ 釜石鵜住居復興スタジアム 市役所送迎→ 鵜住居駅 三陸鉄道→ 釜石駅 JR 釜石線→ 新花巻駅 東北新幹線→ 仙台駅 JR 東北本線→ 岩沼駅 徒歩→宿泊先（原田ホテル）

８月１日（木）

宿泊先 市役所送迎→ 岩沼市役所 市役所送迎→ 千年希望の丘交流センター 市役所送迎→ 岩沼駅 JR 東北本線→ 仙台駅 東北新幹線→ 大宮駅 JR 京浜東北線→ 武蔵浦和駅 JR 武蔵野線→ 府中本町駅

岩手県遠野市視察　（7 月 30 日）

●視察目的：遠野市の災害対応行政（総合防災センター及び遠野市後方支援資料館）について
●視察箇所：遠野市総合防災センター・遠野市後方支援資料館
●資　　料：2019 遠野市勢要覧、遠野議会だより（平成 31 年 4 月号）、令和元年議会のしおり、遠野市の沿岸被災地後方支援、提案書－地震・津波災害における広報支援拠点施設整備―、遠野市後方支援資料館ちらし　他関連資料５点（水道産業新聞・ガバナンス・岩手日報・読売新聞・大災害の時代　より）
●説 明 者：総務企画部防災危機管理課

【遠野市　概要】

北上高地の中南部に位置し、東は釜石市、大槌町、南は奥州市、住田町、西は花巻市、北は宮古市に接し、鉄道、道路（国道）が交差し沿岸と内陸を結ぶ交通拠点である。

基幹産業は農林業であり、米作りを中心に、野菜、ホップ、葉タバコの栽培、家畜の複合経営、乗用馬の産地としても知られている。

また、民話の里としても有名であり、「遠野物語」に代表される歴史と文化を活かした観光事業に力を入れている。

・人口：9973 人（平成 27 年度国政調査）　・面積：825.97 ㎢　・高齢化率：38.7%
・平成 31 年度一般会計予算：179 億 9000 万円

◎見学地：遠野市総合防災センター　（東日本大震災後に新設された）

●ビデオ「遠野市の後方支援―発災から一年の記録―」視聴

●「遠野市の沿岸被災地後方支援」について説明

遠野市は古くから、沿岸と内陸の人・もの・心を結ぶ結節点としての役割を担ってきた。

また、地盤が固い花崗岩であり、災害に強い地域である。

三陸沿岸部は度々、地震、津波に襲われた。明治 29 年（1896 年）の明治三陸地震津波の際には、遠野町（当時）はいち早く見舞金を贈るなど、沿岸部の復旧支援に関わってきた。

＊平成 19 年　9 月　**岩手県総合防災訓練**

・参加機関　87 機関　　・参加人員　8746 人

＊平成 19 年　**三陸地域地震災害における後方支援拠点施設整備構想**

11 月　**三陸地域地震災害後方支援拠点施設整備推進協議会　設立**

・参加市町村　宮古市・釜石市・大船渡市・陸前高田市・山田町・大槌町・住田町・川井村・遠野市

・岩手県総合防災訓練の検証結果をもとに、実践的、実働的な構想である【提案書―地震・津波災害における後方支援拠点施設整備―】を作成、内陸と沿岸部の結節点である遠野市が担うべき役割を、国、県の関係機関 80 カ所に要望、提案を行った。

＊平成 20 年 10 月　震災対処訓練　**みちのく ALERT2008**　開催

・想定　宮城県沖でマグニチュード 8 の地震が発生。沿岸に津波襲来。

・遠野市運動公園を中心に、陸上自衛隊東北方面隊・警察・消防・地域住民が参加する大規模訓練であった。

・参加人員　18000 人　　・車両　2300 台　　・航空機　43 機

＊平成 23 年 3 月 11 日　午後 2 時 46 分

・遠野市の被害：震度 5。市役所庁舎は全壊、避難者 2000 人超え、被害総額は約 32 億円

・午後 3 時（発災後 14 分）：災害対策本部は遠野市運動公園を後方支援拠点として開放
自衛隊・警察・消防等の救援部隊受け入れの準備

・午後 3 時 28 分：市全域に避難勧告、市職員、行政区長、消防団、民生委員等が活動開始

・午後 5 時 40 分：岩手県機動隊が遠野市運動公園に到着。その後、全国から救援隊到着
→訓練の成果

＊平成 23 年 3 月 12 日　午前 1 時 40 分

・大槌町から救援要請。両石、鵜住居地域全滅と一報

・午前 4 時 50 分：大槌町へ向け、救援先遣隊出発。→後方支援開始

＊官民一体の活動：炊き出しに延べ 2050 人の市職員と市民が市内避難所や被災地、避難者へ
14 万 2400 個のおにぎりを 29 日間握り、送った。

3 月 27 日　遠野まごころねっと設立。遠野市民が中心となったボランティア団体

4 月 4 日　災害ボランティア出発：官民一体の支援体制

7 月 25 日　自衛隊撤退

7 月 27 日　遠野市後方支援連携調整会議　設置

●災害関係の法律と実際の乖離

・被災市町村からの要請を前提として災害救助法→間に合わない

・国、県の情報が被災地に届かない

（例：手作りのおにぎりは衛生的に問題があると、県から指示があった）

・機能不全に陥った被災市町村の要請を待たず、情報収集、支援策を決定し、迅速に支援行動開始

＊自治体間の横の連携「水平連携」・責任と権限の枠を超えた支援行動が必要

→新たな仕組みづくりが必要

●広域な後方支援を可能にした大きな要因は、本田敏秋遠野市長の強いリーダーシップ
・阪神・淡路大震災時に、岩手県消防防災課長として県の防災計画の見直しを行った
・三陸の歴史をもとに、遠野市を沿岸部を支える後方支援の拠点とした

【考察】

日本の歴史上類を見ない悲惨な東日本大震災に襲われ、多くの人命、もの、地域が失われてから８年余りが経つ。

本田市長の強いリーダーシップのもと作られた広域の後方支援の仕組みは、自治体間の横の連携、市と市民との協働により、更に進化していると考えられる。

日本全国、災害の無い都市は無い。私達の府中市でも学ぶところは多い。

◎見学地　3.11 東日本大震災　遠野市後方支援資料館

・平成 27 年 3 月 14 日　開所

・遠野市総合防災センター駐車場敷地内

・展示物　活動記録パネル 40 枚、災害対策本部記録模造紙 25 枚、写真パネル 50 枚

・新聞紙面パネル 15 枚、後方支援活動検証記録誌　等

岩手県釜石市　視察　（7 月 31 日）

●視察目的：「ラグビーのまち釜石」の取り組みについて
●視察場所：釜石鵜住居復興スタジアム
●資　　料：令和元年　釜石市議会概要、かまいし議会だより（平成 31 年 3 月、令和元年 6 月）、撓まず屈せず―復興・復旧の歩み―、撓まず屈せず―釜石からのメッセージ、ラグビーワールドカップ 2019 日本大会　岩手県釜石市パンフレット、釜石鵜住居復興スタジアム　パンフレット、釜石こども未来基金ちらし、釜石観光ガイド
●説 明 者：釜石ラグビーワールドカップ推進本部／釜石市議会副議長　山崎長永氏

【釜石市　概要】

岩手県の南東部、リアス式海岸が特色の陸中海岸国立公園のほぼ中央。釜石湾は世界有数の三陸漁場に開けた天然の良港。また、1858 年（安政 4 年）に、銑鉄の精錬に成功した近代製鉄発祥の地でもある。「鉄と魚のまち」として発展した。

昭和 40 年代ころより、鉄鋼業の不振、縮小、農林水産業の伸び悩み等により、厳しい経済状況にあった。釜石のハブ化を目指し港湾機能の整備を図ったが、平成 23 年の東日本大震災で大きな被害を蒙った。「釜石復興まちづくり計画」を策定し、復興に努めている。

平成 27 年には、高炉場跡のある「橋野鉄鉱山」が、世界文化遺産として登録された。

＊平成元年 9 月 26 日に「放射性廃棄物の持ち込み等に関する宣言」をしている。

●釜石市議会副議長 山崎氏より

釜石市は四国 4 県と同じ面積がある。陸中は世界三大漁場の一つ。「鉄と魚とラグビーの街」である。新日鉄釜石ラグビーチームが連覇した。7 月 26 日のワールドカップのテストマッチには、1 万 3000 人が来訪し、釜石ラグビーの再来のようであった。覚悟をもって建設したスタジアムを、これからの街づくりに活かしたい。新たな産業、インバウンドの促進を目指したい。

●ラグビーのまち復興策について

釜石市は、復興のシンボルとして、また将来を担う子ども達に夢、希望、勇気を与えるべく、ワールドカップ開催都市に立候補した。スタジアムを持っていなかった為、「釜石鵜住居復興スタジアム」を新たに整備した。

・総工費　48 億 7800 万円
・整備地　鵜住居は津波被害が最も酷かった地域。スタジアム建設地は、鵜住居小学校、釜石東中学校跡地。この二校は、子ども達が手に手を取り合って津波（16mと想定されている）から逃れた釜石の防災のシンボル的な場所である。
・説明をして下さった増田氏は、ワールドカップ誘致のために、3 年前に市役所に入庁。
　それ以前は、日本ラグビー協会の事務局、釜石シーウェーブスの事務局長を務めた。
・震災時に、選手たちが支援、救援活動。物資の運搬、明るい性格が復旧に役立ったが、地元の方たちから、「練習をしてくれ」と頼まれ、5 月 1 日より練習開始。
・5 月対関東学院戦、7 月対ヤマハ戦の際に、バスを出し避難所から 2000 人の人を迎えた。
　新日鉄釜石ラグビー部時代から続く「大漁旗」応援。
↓
＊釜石市には、地元の応援者、理解者、ラグビー関係者が多い。
★これに力を得て、ラグビーワールドカップ誘致へと動き始めた。

【決定までの道のり】

（平成 23 月 3 月 11 日　東日本大震災）

・平成 23 年 12 月　「釜石市復興まちづくり基本計画」にワールドカップ誘致を記載

・平成 24 年　　釜石市教育委員会事務局スポーツ推進課に「ラグビーワールドカップ誘致推進室」設置

・平成 26 年 9 月　ワールドカップ誘致を平野復興大臣（当時）に要望

・平成 25 年 10 月　森喜朗日本ラグビー協会会長（当時）が来町
国会、国会議員への働きかけを依頼

・平成 26 年 5 月　市民有志の「ラグビーワールドカップ 2019 釜石誘致推進会」発足

・　　6 月　同会が市長に開催都市立候補を要望

・　　7 月　釜石市が開催都市への立候補表明

・　　12 月　岩手県・釜石市共同で、組織員会に開催都市希望申請書を提出

・平成 27 年 3 月　釜石市が国内 12 開催都市に決定

・震災の被害に負けず、地方が頑張っていると国も頑張れる→**日本開催の特色**となる。

・平成 30 年 4 月 27 日　スタジアム着工

・平成 30 年 8 月　　スタジアム完成

＊英国の視察団　来町

・被災した街のインフラ整備が、ワールドカップを契機に発展する。一生懸命やることが、人類の幸せにつながる。これこそが、英国のメリットになる、と説いた。

・視察の際に、引きこもりの子ども達の支援をするＮＰＯに大漁旗を振り歓迎をしてもらった。

＊資金繰りの苦しさ

・スタジアム建設に復興補助金は使えない。嵩上げは復興庁が担った。（17 億円）

・規制が多く、また対象となる制度、補助金が無く、様々な工夫、提案を続け、建設にこぎつけた。

＊市民と共に

・釜石駅前シープラザに、ラグビーワールドカップ関係の展示。

・外国人来訪者への対応を調査したところ、店頭に外国語表示が無い。外国語での挨拶が出来ないことが判明。
↓

・１年間かけ、リーダーを養成し、英会話教室を開設。
　ひな祭り、三味線、団子作り等のイベント、講座に外国人の参加を促したことにより、外国人へのアレルギーが無くなった。

・地元の主婦が翻訳、通訳等に携わっている。

・ラグビー共和国イベント：料理、ビデオ鑑賞。外国の小銭でのやり取りが定着した。

・いち早く、ショッピングモール内に、ストリートラグビー場を設置した事により、多くの市民の参加を得ている。また、インスタ映えも良く好評。

・成人式の帰りにストリートラグビー

・クリスマス時のイベント「100 人サンタクロース」の参加者がストリートラグビーに参加。

・スタジアムの芝刈りに予算 500 万円を要求したが、市民ボランティアが担ってくれた。

・ワインの産地である国々もあるので、釜石市独自のワインを造り販売をしたい。

＊釜石こども未来基金

・5 万円以上の寄付をした個人、先着 2000 名の名前を常設席へ刻む等での基金作り

【目的】子ども達の未来を育てる

・開催前　施設整備、広報活動、おもてなし醸成、ボランティア養成

・開催後　施設の改修・維持管理、若年層の国際交流、人材育成、スタジアムを活用した事業

・東海市からの 30 万円を皮切りに、現在 7 億円集まっている。

＊ワールドカップ終了後への展望

・釜石シーウェーブスの本拠地として活用していくが、シーウェーブスがトップリーグで闘っていくのは難しい。地域のチームをして生きていくのか模索中。

・ラグビーだけでは人は呼べない。シネマ、コンサート等も取り入れながら、ツーリズムとして、仙台辺りから人を呼べるかが課題。

・ラグビーの一体感は地方に合う。他のものとのコラボ。若い人達との連帯により、新しい開発発想を続けていく。

・スタジアムは使う人が、より使いやすくなる事を目指す。

【考察】

お話をして下さった増田さんの情熱、実現していくための努力に心打たれた。

交通不便な地方の一都市の積極的な取り組みは、人口減少に悩む地方にとって、一つの提言になるのかもしれない。

「やり続ける」今日負けても、明日勝てば良い。諦めなければ、いつか勝つ。

が、街作りに活かされている。力強さを感じ、実り多い視察となった。

＊メイングラウンド約 110000 ㎡　＊収容人数：常設約 6000 席・仮設約 10000 席

＊グランドの芝生は、人口繊維、天然コルク、砂を混ぜた特殊芝床に、寒冷地の芝草種子を合わせたハイブリッド芝「コルク　マイクロ　エア　ファイバー」。2 億 5000 万円かかった。

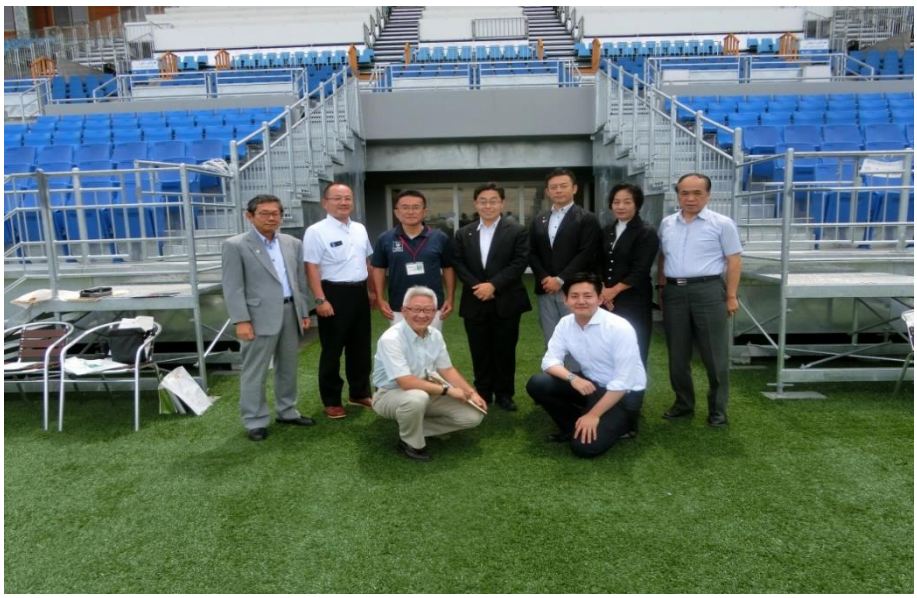
＊メインスタンド：青い座席 600 席は、東京ドーム、熊本県、北上市からの寄贈「絆シート」と称されている。

＊2017 年 5 月に釜石市尾崎半島林火災の被害木（800 本）を利用し、木製シート（ウッドシート）4990 席、ベンチ 108 席、トイレ 2 棟、日よけのルーバーを設置。

＊管理事務棟内

＊管理事務棟

＊土盛りと木材で創ったスタジアム。コンクリートはロッカールーム等のみ。



＊ラグビーワールドカップ開催都市に建つオブジェ。高さ 3m、直径 2m
　釜石のオブジェには、伝統芸能の「虎舞」、釜石観音が描かれている。@鵜住居駅前

＊鵜住居駅前「うのすまいトマス広場」内の「鵜の郷交流館」
　・この広場には、「釜石　祈りのパーク」「いのちを繋ぐ未来館」が併設されている

宮城県岩沼市視察　（8 月 1 日）

●視察目的：「第 2 次岩沼市健康づくり市民計画」に基づく市の取り組みについて
●視察箇所：岩沼市役所、千年希望の丘
●資　　料：議会要覧、いわぬま市議会だより、第 2 次岩沼市健康づくり市民計画、第 2 次岩沼市健康づくり市民計画概要版、第 2 次岩沼市健康づくり市民計画　中間評価、いわぬま“健幸”つくり隊活動記録、岩沼市国民健康保険第 2 期データヘルス計画、千年希望の丘～東日本大震災から学ぶ、復興の象徴「千年希望の丘」、岩沼市千年希望の丘　交流センター、千年希望の丘　散策マップ、きぼうのおか～千年先のきみへ～
●説 明 者：健康増進課／櫻井隆岩沼市議会副議長

【岩沼市　概要】

岩沼市は宮城県南部に位置し、仙台市から電車で 20 分。JR 東北本線と常磐線の分岐点。国道 4 号と 6 号の合流点でもあり、仙台道路岩沼 IC、仙台空港にほど近い交通の要所である。

昭和 39 年に新産業都市指定となったことを契機に、従前からの農商業に加え、紙パルプ、タイヤ、鉄鋼等を主体とした工業都市の要素も加わり、都市化が進んだ。また、仙台のベッドタウンでもあり、田園工業都市として現在に至る。

・人口：44013 人　・面積：60.45 ㎢
・一般会計：184 億 900 万円

●「第 2 次岩沼市健康づくり市民計画」に基づく市の取り組みについて

・第 1 次計画からの基本理念**「市民一人ひとりが生きがいを持ち、ともに支え合い、いつまでも元気に生活できる健幸な いわぬまにしよう」**を基に、第 2 次計画の策定を行った。
・自助・共助・公助の目安とする。概要版は全戸配布。
・507 項目の指標
・推進体制：健幸つくり隊の更なる展開。協議会へ報告し、進行管理を行っている。
・成果：平成 30 年に市民 2000 名と小学 5 年生と中学２年生の保護者を対象に、健康意識調査を行った。飲酒以外の項目は下がっていない。
・年代別に目標を設定し、新たに項目を増やした。
・健康寿命の捉え方：県の衛生調査では要介護 2 以上を不健康と捉える。
健康寿命と平均寿命の差が短い方が良いと考えている。特に女性が 3.97 で長い。県全体で下から 4 位。男性は 1.94→どのような取り組みが必要か調べていく。
・調査方法：成人は郵送。児童生徒の保護者は学校から。3 歳 6 カ月児は問診票と共に郵送。
回収率　成人：44.1%　保護者：52.8%　3 歳 6 カ月児：88.3%
・ガンの医療用ウィッグは？→平成 31 年度から県の補助で行っている。
・メンタルヘルスは幅広く展開している。
・母子保健→子育て中のメンタルケア→新生児訪問、鬱チェック、保健師訪問、産後ケア事業として取り組んでいる。
・震災後：県の心のケアセンターでの個別相談
・特定健診：6～７月の 2 カ月間。集団検診は検診団体に依頼している。医師は個別対応もある。
・子育て支援センター：出前講座で健康チェック
・複数会場→「からだ診るカフェ」開催も視野に入れている。

岩沼市は 2011 年の東日本大震災で、市域の半分が浸水し、沿岸部 6 地区の被害が酷く、多くの人命が失われた。

岩沼市はいち早く、集団移転事業を進め、集団移転地整備、災害公営住宅建設を進めた。千年希望の丘へ向かう途中の集団移転地は防災、コミュニティ作りに配慮した住宅地となっている。

平成 28 年 4 月には、仮設住宅を解消することが出来た。これは、特筆すべきことである。

岩沼市は減災、多重防御を目途として、防潮堤、千年希望の丘、貞山堀（伊達正宗公時代から掘り始められた日本最長の運河）の護岸、嵩上げを行っている。

●**千年希望の丘**：居住禁止となった地域を活用した復興を象徴するメモリアル公園。

・避難場所、防災養育の場所、多重防御の要の役割を持つ。

・沿岸部 10 ㎞に、6 つの公園と園路。土台に震災ガレキを活用した 15 基の避難丘である人口丘。交流センター、津波と同じ 8ｍの高さの慰霊碑、日時計、津波被害を伝える集落の跡がある。

・多くのボランティア、企業等の協力により、2013 年から 2017 年までに、30 万本の植樹をしている。

【考察】

岩沼市の健康づくり計画の周到さに驚くとともに、今後の取り組み状況、データの変化の情報は興味深い。

震災後、いち早く集団移転を成功させた事に驚嘆した。

千年希望の丘公園の中に、櫻井副議長のお母さまのご実家の跡が残されているとのお話しは、胸を打った。

＊岩沼市役所にて

＊東日本大震災の被災跡

＊千年希望丘・植樹のご案内

＊慰霊碑：津波と同じ　高さ 8m

【まとめ】

今回の視察で訪れた岩手県遠野市・釜石市・大槌町・宮城県岩沼市は、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災で大きな被害を蒙った自治体である。

突然の大災害で失ったものは多く、それぞれの復旧、復興、まちづくりを学ぶことが出来た。

遠野市においては、歴史的、地理的、交通面の諸条件を考え合わせ、震災発生の 4 年前から、沿岸部への広域支援・後方支援の体制作りに、県、国を巻き込んで、積極的に取り組んできた。これは、事例として示唆するものが多い。

府中市においては、市内の武蔵野の森公園は、広域支援の拠点として位置づけられているが、市と東京都、国との連携、協力を進めていく事が肝要であろう。

釜石市では、ラグビーというスポーツを通して、下降をたどる市に多面にわたってテコ入れをしている。大都市からは遠距離であるにも関わらず、「ラグビー　2019 ワールドカップ」開催を獲得し、スタジアム新設にこぎ着けた努力には目を見張るものがあった。

「スポーツタウン」を標榜する府中市は、市内のスポーツ資源を更に活用し、産業、教育等の推進が可能であろう。

岩沼市では、綿密な「健康づくり計画」が策定され、市民と共に事業が進められている。

高齢少子化が加速していく現在、健康を保つことは個人の問題だけでなく、行政的にも影響は大きい。

また、岩沼市は東日本大震災時に被害を蒙ったが、その後のいち早い街の立て直しには、目を見張るものがある。居住禁止地域に作られた「千年希望の丘」は、東日本大震災のメモリアルであり、減災の役目をおう壮大なプロジェクトであり、街を守るという堅い決意が見られる。府中市は海には近接していないが、多摩川への対策を更に進める必要があるのか検討を進めることも考慮していきたい。

岩沼市の特筆すべきことは、近隣自治体と比較して各段に早い仮設住宅解消への道筋である。各地で困難を極めた集団移転が成功したことは学ぶことが多い。

今回の視察は学ぶことが多く、大変実り多いものであった。防災、災害時の対応に限らず、府中市の街づくりの提案作りに活かしていきたいと考える。

お忙しい中、視察を受け入れ、丁寧に対応して下さった各市町に感謝申し上げる。

文責：前川浩子